臥薪嘗胆

要旨

呉王闔廬は伍子胥を用いて国事をつかさどらせ、越を伐ったが、敗死する。その子の呉王夫差は「薪中に臥す」苦難の末、越を夫椒で破る。敗れた越王句践は和睦を乞い、越から賄賂を受けていた宰相伯嚭の進言もあり、助かることができた。一方、引き続き呉王夫差に仕えた伍子胥は、伯嚭の讒言によって罪に陥れられ、呉王夫差の暗愚を罵り呉の滅亡を予言しつつ自害した。句践は、胆を嘗める苦難の末に重臣范蠡と共に国力を充実させ、ついに呉を討ち破った。呉王夫差は伍子胥に合わせる顔がないと恥じつつ自害した。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～ P一四〇・6〈以二呉兵一入レ郢。〉	呉王闔廬は子胥を登用して国政をとらせた。子胥は楚の人であったが、父が楚の平王に殺されたので、呉に逃げて来た。子胥は呉の兵を率いて楚の都に攻め入り、父の仇に報いた。
第二段	P一四〇・7〈呉伐レ越。〉～ P一四〇・9〈而忘三越人之殺二而父一邪。〉	闔廬は越との戦いに敗れて死ぬと、子胥は引き続きその子の呉王夫差に仕えることとなった。夫差は「臥薪」して敗北の屈辱を忘れないようにした。
第三段	P一四〇・10〈周敬王〉～ P一四一・2〈説二夫差一赦レ越。〉	夫差はついに越を夫椒で破った。ところが越から賄賂を受け取っていた呉の宰相伯嚭は、子胥の反対を押し切って呉王に説き、命乞いをした越王句践を許させた。
第四段	P一四一・3〈句践反レ国〉～ P一四二・2〈事レ謀レ呉。〉	帰国した越王句践は、動物の胆をなめては会稽山の恥を忘れないようにし、重臣范蠡と共に呉を討つ策を練った。

第五段	P 一四二・3〈太宰嚭〉～ P 一四二・7〈命曰二胥山一。〉	子胥は宰相伯嚭の讒言を受けいれた呉王夫差によって自害させられた。子胥は遺言で呉の滅亡を予言したので、怒った夫差は、死んだ子胥の屍を辱めた。呉の国の人は子胥をあわれに思って、その死を弔った。
第六段	P 一四二・8〈越、十年生聚〉～ 終わり	越は二十年にわたって国力を蓄え、ついに呉を破った。夫差も命乞いをしたが范蠡に斥けられた。呉王夫差は、あの世で子胥に合わせる顔がないと言って、布で顔を隠して自害した。

訓読と現代語訳

【第一段】 ①呉王闔廬、伍員を挙げて国事を謀らしむ。②員、字は子胥、楚人伍奢の子なり。③奢、誅せられて呉に奔り、呉の兵を以ゐて郢に入る。

【第二段】 ④呉越を伐つ。⑤闔廬傷つきて死す。⑥子の夫差立つ。⑦子胥復た之に事ふ。⑧夫差讎を復せんと志し、朝夕薪中に臥し、出入するに人をして呼ばしめて曰はく、「夫差、而越人の而の父を殺しを忘れたるか。」と。

【第三段】 ⑨周の敬王の二十六年、夫差越を夫椒に敗る。⑩越王句践、余兵を以ゐて会稽山に棲み、臣と為り妻は妾と為らんと請ふ。⑪子胥言ふ、「不可なり。」と。⑫太宰伯嚭越の賂を受け、夫差に説きて越を赦さしむ。

【第四段】 ⑬句践国に反るや、胆を坐臥に懸け、即ち胆を仰ぎ之を嘗めて曰はく、

【第一段】 ①呉王の闔廬は、伍員を登用して国政をとらせた。②伍員は字を子胥といい、楚の国の人伍奢の子である。③伍奢は（楚の平王に）罪をとがめて殺されたので子胥は（難を避けるため）呉の国に亡命し、（その後闔廬の計らいで）呉の兵を（借り、それを）率いて（楚の都の）郢に攻め入って（て父の仇に報い）た。

【第二段】 ④（その後）呉が越を攻撃した。⑤（敗れた）闔廬は傷を負って死んだ。⑥（そこで）子の夫差が（呉の）王位に就いた。⑦子胥は引き続き夫差に仕えることになった。⑧夫差は父の仇を討とうと心に決め、明け暮れ薪の上に寝（起きし）て（身にこたえる痛みで恨みを新たにし）、（また家の中の部屋に）出入りするごとに（恨みを忘れないようにするため）家来に言わせた、「夫差よ、お前は越の人間がお前の父を殺したのを忘れたのか。」と。

【第三段】 ⑨周の敬王の二十六年（前四九四年）に、夫差は（とうとう）越を夫椒の地で破った。⑩越王句践は、敗残兵を率いて会稽山に立て籠もり、（夫差に対して）自らは（あなたの）家来となり、妻は召し使いとなって仕えます（から、命だけは助けてください）と願い出た。⑪子胥は（強い口調で）言った、「（この願いを許すことは）よくない（殺してしまいなさい）。」と。⑫（ところが、）宰相伯嚭は越の賄賂を受け取っていたので、夫差を説得して越王をゆるさせてしまった。

【第四段】 ⑬（こうして）越王句践は越の都に戻ると、胆を寝起きする自分の部屋につり下げ、上を向いて肝をなめては（その苦さで敗北の屈辱を新たにし自分に言い聞かせ

「女 会稽の恥を忘れたるか。」と。⑭国政を挙げて大夫種に属し、而して范蠡と与に兵を治め、呉を謀るを事とす。

【第五段】 ⑮太宰嚭子胥 謀の用ゐられざるを恥ぢて怨望すと譖す。⑯夫差 乃ち子胥に属鏤の剣を賜ふ。⑰子胥其の家人に告げて曰はく、「必ず吾が墓に檟を樹ゑよ。檟は材とすべきなり。吾が目を抉りて東門に懸けよ。以て越兵の呉を滅ぼすを観ん。」と。⑱乃ち自剄す。⑲夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以てし、之を江に投ず。⑳呉人之を憐れみ、祠を江上に立て、命けて胥山と曰ふ。

【第六段】 ㉑越、十年生聚し、十年教訓す。㉒周の元王の四年、越呉を伐つ。㉓呉三たび戦ひて三たび北ぐ。㉔夫差姑蘇に上り、亦 成を越に請ふ。㉕范蠡可かず。㉖夫差曰はく、「吾以て子胥を見る無し。」と。㉗幎冒を為りて乃ち死す。

て）言った、「お前は会稽山で受けた（あの苦い）屈辱を忘れたのか。」と。⑭国政の全てを重臣の文種に任せ、自分は范蠡と共に（もっぱら）軍隊を訓練し、呉を攻略する計画に専念した。

【第五段】 ⑮（一方、呉の方では）宰相伯嚭が（夫差に）子胥は自分の策が採用されなかったことを悔しいと思い（王様を）恨んでいますと讒言した。⑯（それを信じた）夫差はそこで子胥に（これで自害せよという意味を込めて）属鏤という名剣を賜った。⑰子胥は家族に次のように告げて言った、「（私が死んだら）必ず私の墓にひさぎの木を植えよ。ひさぎは（成長して、呉王夫差の棺桶の）材料にすることができる。（そして、）私の目をえぐり取って東の城門にかけておけ。この目で越の兵が呉を滅ぼすところを見てやろう。」と。⑱そうして（子胥は）自分で自分の首をはねて死んだ。⑲夫差は（その話を聞いて激怒し子胥の）死体を取って、酒を入れる馬皮製の袋に詰め、長江に投げ込んだ。⑳呉の国の人々は子胥をかわいそうに思って、ほこらを長江のほとりに建て（て子胥の霊を弔い）、そこを胥山と名付けたのであった。

【第六段】 ㉑越の国では、十年間人口を増やし、物資を蓄えて国力を充実させ、（次の）十年間で兵を訓練し（戦力を向上させ）た。㉒周の元王の四年（前四七三年）に、越は呉を攻撃した。㉓呉は何度も戦ったがそのたびに敗北した。㉔夫差は姑蘇台に登り、（先に越王句践が会稽山でしたのと同じように）講和を越に願い出た。㉕（しかし、）范蠡は聞き入れなかった。㉖夫差は言った、「私はあの世で子胥に合わせる顔がない。」と。㉗死者の顔に掛ける四角の布を作って（顔を隠して）とうとう自害した。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「春秋時代」の呉楚の抗争の概略を理解する。

❶漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。この調査や説明に、多くの時間を費やすことができないので指導者が事前にまとめたプリントを用意し配布するか、そのポイントだけを板書して簡単に説明してもよい。

「『春秋時代』の呉楚の抗争」の概略プリントは、後出「『解説』春秋時代－呉楚の抗争－」を参考にして作成し、確認させるとよい。

展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「臥薪嘗胆」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめる。知技⑴ウ **〔「言葉と表現」 1〕**
❹現代語訳をする。知技⑵ウ
❺内容読解をする。思判表B⑴ア **〔「学習のポイント」 1・2〕**

❶範読はゆっくり丁寧に読む。

【注意させる読みの箇所】「挙二伍員一謀二国事一。」「奢誅」「事」「出入使二人呼一曰」「而忘二越人之殺一而父一邪。」「敗」「説二夫差一赦レ越。」「嘗」「女忘二会稽之恥一邪。」「恥二謀不一レ用」「怨望」「賜」「抉」「江上」「成」

❷辞書などで「臥薪嘗胆」の意味を調べ、それを参考に、要旨をノートにまとめ、発表させる（五十字程度）。その際、物語の展開が分かりやすくするため、P一四〇の「人物相関図」を利用させる。要旨の発表は、黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。

【評価】「臥薪嘗胆」の意味を調べ、我が国の言語文化に特徴的な語句の文化的背景に理解を深めているか、確認する。

❸「臥新」部分と、「嘗胆」部分に分けて現代語訳をする。ともに、生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。

・「臥新」部分

【注意すべき句形】「挙二伍員一謀二国事一。」（使役）「奢誅」（受身）、「出入使二人呼一曰」（使役）「而忘二越人之殺一而父一邪。」（疑問）「説二夫差一赦レ越。」（使役）

【注意すべき語句】「挙」「誅」「以」「事」「而」「敗」「略」

・「嘗胆」部分

【注意すべき句形】「女忘二会稽之恥一邪。」（疑問）「恥二謀不一レ用」（受身）

【注意すべき語句】「嘗」「事」「怨望」「賜」「抉」「江上」「北」「成」

【評価】【注意すべき語句】【注意すべき句形】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❹次の**ア**～**コ**のポイントに注意する。**ア**「入レ郢」とは誰が何のためにそうしたのか、**イ**夫差が「薪中」で寝起きした理由、**ウ**「請二為レ臣妻為レ妾。」から読み取れる句践の気持ち、**エ**子胥が「不可。」と言った理由、**オ**太宰伯嚭が夫差に越王句践を許すよう助言した理由、**カ**句践が「仰レ肝嘗レ之」した理由、**キ**夫差が子胥に「属鏤之剣」を与えた理由、**ク**遺言から読み取れる子胥の気持ち、**ケ**夫差の子胥に対する気持ちの変化、**コ**夫差が「吾無二以見一子胥一。」と言った理由。それぞれグループで話し合い、代表が発表してもよい。

ア…本文からだけでは、「何のために」が分かりにくい。そこで、「子胥は、呉の兵を借りてでも、したかったこととは何か。」という助言を与える。

イ…「『而忘二越人之殺一レ而父一邪。』の一文に注意しよう。」という助言を与えてもよい。

ウ…「ここはどのような場面か。その場面で発せられた言葉だから、どのような思いで発したものか。」など助言をいくつか与えると、読み解きのためのグループワークがスムーズになる。

エ…「ここは、**ウ**で確認したように句践の命乞いの場面。これに対して子胥は『不可』と言う。なぜ命乞いを許さなかったか。」という助言を与えてもよい。

オ…「太宰伯嚭受二越賂一、説二夫差一赦レ越。」に注意させればよい。文脈を丁寧に確認させれば、さほど難しい問題ではない。

カ…「嘗レ之」の「之」は「胆」を指し、苦いもの。「臥新」と同じ意味を持つこと理解させる。「『臥新』と『仰レ肝嘗レ之』は同じ意味。」という助言を与えてもよい。復讐心・敵愾心を持続させるため。

キ…まず、君主が臣下に剣を与える意味（自害を命じる）を理解させる。その意味をグループの中に知っている生徒がいれば、その知識をグループ内で共有させる。そうでない場合は、「樹二吾墓檟一。」とあることから、生徒に「自害せよ」だと理解させる。次に、「なぜ、夫差は自害を命じたのか。その理由は、『太宰嚭譖下子胥恥二謀不一レ用、怨望上。』にある。この文より、誰の策略によって、誰と誰の人間関係はどうなったか。」という助言を与える。「語句の研究」「恥謀不用」参照。

ク…「子胥の遺言の中に、その気持ちを表現している箇所があるので、それを根拠に話し合ってください。」という助言を与えてもよい。子胥の気持ちは「以観二越兵之滅一レ呉。」に表現されているので、この言葉をどのように読み解かせるかが要点。そして、どのような言葉に言い換えられるか、その言

葉をグループで話し合わせる。

ケ…夫差の視点から子胥がどのように映ったかを理解させる問い。グループの話し合いによって、本文を丁寧に吟味させる。「気持ちの変化は、この場合は①夫差が子胥を自害させたときの子胥に対する気持ち、②夫差が「自刎」するときの子胥に対する気持ちがどのようなものかを読み解くことが要点です。」という助言を与えてもよい。

コ…場面展開より、ここは、呉王夫差が自分の不明を恥じながら「自刎」するところ。誰に対して何に恥じたのかをグループで話し合わせる。

【評価】　それぞれの読解のポイントについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❺自分で本文を丁寧に吟味し、グループの内で発表させる。その発表内容をグループ内で検討させる。

■まとめ

学習活動のポイント

❶夫差が句践に敗れたのはなぜか。その理由をグループで話し合い、代表が発表する。思判表B(1)イ 主態 **〔「言語活動」1〕**

❷❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸四字熟語を創作し、発表する。また、その作品の意味と使い方も解説する。**〔「言葉と表現」2〕**

❹まとめの朗読をする。

❶自由に話し合わせてよいが、本文の内容になるべく即した意見にするよう注意させる。やはり、諫言の臣が必要なことはいつの世も同じという読み解きをさせればよい。さらに、ここは話し合う活動なので、意見を述べることと、聞くことを大事にさせる。意見を述べるときは、「私は 意見（結論） のように考えます。なぜなら、結論を導いた根拠 だからです。」のパターンで話し、聞くときは相手の意見をよく聞く傾聴の態度に徹するよう注意させる。

【評価】　・本文に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、夫差が句践に敗れた理由を解釈しているか、話し合いの観察などにより確認する。

・夫差が句践に敗れた理由について、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」と告知する。生徒が考えを

深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという言語活動が大事となる。

❸ゲーム感覚で四字熟語を作らせたい。作品の発表は、グループ内でよい。

❹大きな声で各文の意味を考えながら、音読させる。

発問例

●一四〇ページ

問「挙」（3行目）の意味を的確に表す二字の熟語を答えよ。

答 登用。推挙。挙手。

問「奢詐（セラレテ）而奔レ呉（リ）、以二呉兵一入レ郢（ルニ）。」（5〜6行目）について、

1 **「詐」と同じ意味で使われている熟語として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)詐伐　(イ)詐罰　(ウ)詐求　(エ)詐殺

2 **「奔」の主語は誰か。**

3 **[易]A「以」はどのような意味か。**

[中]B「以」と同じ働きのものを、次の中から選べ。

(ア)請以レ剣舞。
(イ)孔子以二詩書礼楽一教。
(ウ)宮之奇以二其族一行。　＊宮之奇＝人名。
(エ)文以二五月五日一生。　＊文＝人名。

4 **「入レ郢」とあるが、誰が何のためにそうしたのか。**

答 1 (エ)
2 伍子胥（員）
3 A 軍隊などを率いる
　B (ウ)
4 伍子胥が、楚王に殺された父（と兄）の仇に報いるため。

語句の研究

●一四〇ページ

1 臥薪嘗胆　「薪に臥し胆を嘗める」とは、仇（あだ）を討つために、長い間、苦難に耐えることの例え。非常な苦心を重ねて復讐を図ること、将来の成功を図ること。「臥薪」「嘗胆」ともに、過去の恥辱を忘れないように身を苦しめること。

3 呉　春秋時代（「管鮑之交」「解説1　春秋時代の概略」参照）の末期、長江下流域に急激に勃興し、一時中原に覇を称えた大国。姑蘇（現在の江蘇省蘇州市）に都した。「史記」呉太伯世家によると、周の文王の叔父といわれる太伯は、弟の季歴に位を譲るため南方の荊蛮の地に落ち延び、文身断髪（入れ墨をし、髪を切る呉越一帯の風習。野蛮とされた。）して呉国を建てたとある。その後、太伯から数えて十九代の寿夢（じゅぼう）は王号を称した。この頃中原の大国晋は、六卿と呼ばれる有力家臣の権力闘争から内紛が絶えなかった。するとその混乱をついて南方の大国楚が中原をうかがう。それを抑えようと、晋が呉と同盟関係を結び武器・兵法を伝えて援助した。これが、呉が強大化した原因の一つであったといわれる。前四七三年、不倶戴天の敵として激しく死闘を繰り返した越によってついに滅ぼされた。

3 闔廬　「闔閭」とも書く。呉が周王朝を無視し「王号」を僭称するようになった時を初代とするなら、初代の呉王は寿夢となる。それから数えて六代目の呉王が闔廬。ちなみに、太伯を初代とするなら寿夢は十九代。名は光。在位、前五一四年〜前四九六年。春秋五覇の一（別説もある）。即位には複雑な経緯がある。王寿夢には四人の息子があったが、末子の季札がずば抜けた賢人で、王位を譲りたいと考えた。しかし寿夢が死んでも季札は固く辞退し、やむなく長兄の諸樊が即位した。諸樊は父の遺志を継ごうと、王位を息子でなく弟に順に伝えて末弟の季札に及ぼそうとした。ところが余昧の次に季札が王位を継ぐ番になっても季札は固辞する。そこで余昧の息子の僚が即位した。だがこれが公子光には気に入らない。王位は、当然長兄諸樊の子供である自分に戻るべきだというのである。機会を狙っていた公子光は、王僚を暗殺して即位する。これが闔廬である。

［呉系図］数字は即位順

補 4本文だけからでは分からないので補足する。ただし、内容的には伍子胥（員）の人間性を暗示するエピソードとして重要。

問 **子胥はなぜ呉王に仕えたのか。**

答 楚王に父（と兄）を殺された仇に報いるため、呉の力を借りようとしたから。

補 「奢誅而奔レ呉、以三呉兵一入レ郢。」に注意させ、指導者が補足する。

問 **「伐」（7行目）・「討」・「撃」のそれぞれの意味を調べよ。**

答 伐＝軍隊を率いて攻撃する。討＝罪を言い立てて退治する。撃＝手や物で強く打つ。

補 漢和辞典を用いる。

問 **「讎」（8行目）の内容を説明せよ。**

答 父を殺された仇。

補 夫差は越王句践によって父（闔廬）を殺されたので、その仇を討とうとした。

問 **「臥二薪中一」（8行目）について、主語は誰か。**

答 [1] [2]

「薪中」で寝起きした理由は何か。

答 [1]夫差

[2]復讐の思いが鈍らないようにするため。

補 薪の上はデコボコして固く寝にくい、それによって心身を苦しめ、ともすれば柔弱になる気持ちを戒め、報復の念を励ますのである。

問 **「出入」（8行目）の主語は誰か。**

太伯…①寿夢
- ②諸樊——⑥光（闔廬）
- ③余祭　⑦夫差
- ④余昧——⑤僚
- 季札

3挙 登用する。挙げ用いる。

3伍員 生年未詳～前四八四年。楚の人。字は子胥。呉の闔廬・夫差二王に仕え、呉越の抗争を彩る呉側の謀臣。伍氏は楚の名族で、父の伍奢は平王の太子建に仕える大傅（たいふ）（侍従長）だったが、平王の寵臣、少傅（副侍従長）費無忌の讒言にあい、伍奢は長男の伍尚（子胥の兄）と共に処刑されてしまう。子胥は平王への復讐を心に誓って楚を逃れ、呉に亡命した。当時、呉は王僚の時代だったが、子胥は公子光の王位簒奪の意図を知り、専諸という勇者を公子光に推挙した。のち果たして専諸は王僚を暗殺し、闔廬（公子光）が即位、子胥は外交顧問に取り立てられて国政に参与することになった。

4字 「管鮑之交」の「語句の研究」「字」を参照。

4楚人 「楚」は春秋戦国時代に、長江中流域を領有した国。都は郢（現在の湖北省荊州市）。「鼎の軽重を問う」の故事で有名な荘王（前六一三年～前五九一年在位）の時代には、中原に覇を称え、以後、晋と覇者を争った。

5奢誅 伍奢が誅せられた。文脈から受身に読む。「誅」は、罪をとがめて殺す意。

キー・ポイント　伍奢が誅せられた理由の補足 伍奢が誅せられた事情は前出「語句の研究」「伍員」にあるとおりだが、多少補っておくと、費無忌は太子建の少傅でありながら太子などおかまいなしで、かえって何かにつけて太子を平王に中傷し、王に取り入ろうとした。太子を弁護して王を諫めた伍奢は、費無忌の入れ知恵によって捕らえられ、伍奢の二人の息子伍尚と伍員（子胥）も父の助命を条件に召し出される。思いやりの深い兄の伍尚は、殺されると分かっていながらこの命令に応じ、気性の激しい弟の子胥は命令に従わず、逃れて父と兄の復讐を誓った。獄中の伍奢は子胥の亡命を知ると、「楚の君臣はこれから苦しむことになるぞ。」と言ったと伝えられている。予言どおり、楚を滅ぼすが、「史記」伍子胥列伝によると、そのとき、平王はすでに死んでおり、息子の昭王も出奔したあとだった。やむなく子胥は平王の墓をあば

夫差。

補 家臣とする説もある。「語句の研究」の「出入使二人呼一」を参照。

問 **「使二人　呼一」（8行目）を書き下し文に改めよ。**

答 人をして呼ばしめて

問 **「而」（9行目）について、**
[易]**読みを、現代仮名遣いで答えよ。**
[易]**同じ読み方をする漢字一字を本文中から抜き出せ。**
[中]誰を指すか。

答 [3] [1]なんじ
[2]女
[3]夫差

問 **夫差は復讐を忘れないためにどのような対策をとったか。本文から該当する部分を抜き出せ。**

問 **「周敬王二十六年、夫差敗二越于夫椒一。」（10行目）について、**
周王の年号で時が指定されたのはなぜか。

答 [2] [1]
「敗」とはどのような意味か。
[1]権威が地に落ちたとはいえ、まだ周王朝の世であったから。
[2]敵をうちやぶる。

補 **● 一四一ページ**
他動詞である。

き、屍を引きずり出して三百回も笞打って父と兄の恨みを晴らした。この非道の仕打ちをとがめられた子胥は、「吾日暮途遠、吾故倒行逆施之」（私は日が暮れて遠い道を行くようなものだ。だから手段を選んでいるいとまはないのだ。）」と言ったとされる。

6 以二呉兵一入レ郢　「以」は動詞としての用法。「ひきヰル」と読み、ひきつれていく・みちびくの意。「率」と同じ。呉に逃れて以来十六年目の前五〇六年、子胥は闔廬に従って楚の都郢を陥れた。ところが、すでに、平王は死んでいた。前出「キーポイント」参照。

7 呉伐越　前五〇五年、呉王闔廬が楚の都郢にいる隙を突いて、越が呉を攻撃したことに対する報復として、前四九六年に、呉が攻め込んだ。「伐」は、軍隊を率いて攻撃する。なお、「討」は罪を言い立てて退治する。「撃」は手や物で強く打つ。「越」は、春秋時代末期、長江下流域、呉の南方に興起して呉と激しく争った国。会稽（現在の浙江省紹興市）に都した。「史記」越王句践世家では、夏王朝の禹の末裔で、始祖夏后帝少康の庶子が会稽に封ぜられ、文身断髪したが、その後二十余世を経て允常の代になって強盛となり、呉王闔廬と対立した。中原の晋と楚との対立において晋が呉と結んで楚を牽制しようとしたように、楚は越と同盟関係を結んで呉に当たろうとしたこと、また地理的にも呉と越とは近接し、どうしても両立しない関係にあったことなどから、両国は死闘を繰り返した。

7 闔廬傷而死　越では允常が死ぬとその子の句践が位に就き、初めて王号を称した。その元年（前四九六年）、呉王闔廬は越の喪に乗じて越を攻撃したが、これを檇李で迎え撃った句践は決死隊に敵軍の面前で自刎させるという奇策を用い、度胆を抜かれた呉軍の虚をつき敗走せしめた。この戦いで闔廬は、矢で射られ親指が傷つき、それが原因で死んだ。

7 夫差　呉王闔廬の子。呉の七代目の君主。在位、前四九五年～前四七三年。

7 事　上長の人の用事を務める。奉仕する。「師事」「兄事」。なお、「仕」は主人をもって奉公する。

8 復レ讎　仇を討つ。「讎」は敵対する相手。敵。

8 朝夕　朝と晩。転じて、明け暮れ、いつも。

問「請為臣妻妾」（1行目）について、

1 **現代語訳せよ。**

2 **[中][A]越王句践の気持ちとして適切なものを次の中から選べ。**

(ア)夫差はすばらしい人物なので是非仕えたいという気持ち。

(イ)戦争に負けるという恥を受けたのだから、殺してくれという気持ち。

(ウ)夫差の家臣になるのも仕方がないという諦めの気持ち。

(エ)何とか生き残って夫差に対して復讐してやろうという気持ち。

[難][B]どのような句践の気持ちを読み取ることができるか。

答 1 自らは家来となり、妻は召し使いとなって仕えたいと願い出た。

2 [A](エ)

[B]何とか生き残ろうとする気持ち、など。他にも切羽詰まった気持ち、口先だけで切り抜けようとする気持ち、死を恐れる気持ちなど、いろいろ答えが出るものと思われるが、ここは殺されそうになっている場面であることに注意させる。

補

問 ◉ **子胥が、「不可。」（2行目）と言ったのは、なぜか。**

答 伍子胥は、この会稽の勝利という絶好の機に句践を殺しておかないと将来に禍根を残

---

8 臥二薪中一　「臥」は寝ること。固い薪を積み重ねた上に寝起きすることで心身を苦しめ、復讐の思いが鈍らないようにした。

8 出入使二人呼一　「出入」はその主語を巡って、(1)夫差と、(2)家臣の両説があるが、ここでは「左伝」定公十四年の条に「夫差使二人立二於庭一若出入必謂レ己曰…」とあるのに従って(1)ととり、庭などに家臣を立たせておいて自分が出入りするたびに言わせたものとする。参考までに、(2)は、臣下が夫差の前に出るたびに挨拶代わりに叫んだものということになる。なお、「史記」呉太伯世家では、「爾而忘二句践一殺二汝一乎」という言葉は闔廬の臨終に当たっての夫差への遺言を踏まえたものということになっている。それに対し、夫差は、三年のうちに仇を報いますと答えている。

9 而忘二越人之一而父一乎　お前は越の人間がお前の父を殺したのを忘れたのか。「而」は「汝・女・爾・若」と同じ。二人称代名詞。「乎」は、疑問・反語を表す助字。「句法」参照。

10 周敬王二十六年　前四九四年。当時は春秋時代（前七〇年～前四〇三年）であり、権威が地に落ちていたとはいえ、周王朝の世であるので、周の年号でいう。

10 敗二越于夫椒一　句践は夫差が軍事力強化に努めていると聞き、先制攻撃をかけようとした。句践の臣范蠡はまだその時機でないとして諫めたが、句践は聞かずに出撃し、この敗戦となったのである。「于」は場所を表す助字。「夫椒」は江蘇省の南西、太湖の中にある山。この辺りが呉と越との国境になっていた。「于」は、「於・乎」と同じ用法の助字。ここでは場所を表す。

10 越王句践　越の二代目の君主。允常の子。在位、前四九六年～前四六五年。春秋五覇の一（別説もある）。呉平定後、句践は、貢ぎ物を周王に献上して覇者（侯伯）の称号を授けられた。功業成ったあと、越王のもとを去ろうとした范蠡（後述）の言葉に「越王為レ人長頸烏喙、可二与共一レ患難一、不レ可二与共一レ楽。（越王は首が長く口は烏のような不吉な人相だ。苦難をともにすることはできても、楽しみは分かちあえない人柄だ。）」とある。「句」は「勾」とも書く。

● 一四一ページ

1 余兵　敗残兵。五千人であったという。

1 棲　立て籠もる。もと、鳥などがねぐらに

すと考えたから。

補「なぜ句践の命乞いを許さなかったのでしょうか。許してしまうとどうなると考えたのでしょうか。」というヒントは与えてもよい。「史記」呉太伯世家では、「句践為レ人能辛苦。今不レ滅、後必悔レ之。」（句践の人と為り、能く辛苦す。今滅せざれば、後必ず之を悔いん。）とある。

問「太宰伯嚭受二越賂一、説二夫差一赦レ越。」（2行目）について、

「賂」はどのような意味か。

「説二夫差一赦レ越。」を現代語訳せよ。

太宰伯嚭が越王句践を赦すように夫差に助言したのはなぜか。

答 1 賄賂

2 夫差を説得して越王をゆるさせた。

3 太宰伯嚭は越から賄賂を受け取り内通していたから。

●一四二ページ

問「会稽之恥」（1行目）とは具体的にどのようなことか。

答 夫差に敗れた越王句践は、会稽山で夫差に命乞いをするなど屈辱的な目にあったこと。この故事より「会稽の恥」を敗戦の恥辱というようになった。

補

問「挙二国政一」（1行目）の「挙」はどのような意味か。

宿る、また、やすむ意。

1会稽山　浙江省紹興市の南にある山。風光の名勝としても名高く、麓に馬をまつった廟がある。

1請レ為二臣妻一レ妾　自らは家来となり、妻は召し使いとなって仕えたい。妻ともども服従したい、の意。助命と和睦を嘆願する言葉。「臣」「妾」は、もと、男女の召し使い、奴隷。

1子胥言　「言」は、ここでは強く主張する・自分から言い出すの意。「曰」を用いてもいいところであるがそうしていないのは、「曰」は言語音声を発することをいう語なので、主張するというニュアンスを伝えにくいためともとれる。

2太宰　官名。宰相。王を輔け、すべての官を統括する。

2伯嚭　生年未詳～前四七三年。楚の人。大夫であった祖父が楚で誅殺されたので呉に亡命し、闔廬・夫差の二王に仕えた。夫差が即位すると宰相にとりたてられていっそう重きをなしたが、伍子胥が対越強硬論を唱えたのに対し、伯嚭はしばしば越から賄賂を受けて融和策を主張して対立した。この会稽の勝利のときがその初めで、伍子胥がこの機会に句践を討っておかないと将来に禍根を残すと説いても、夫差は伯嚭のほうを信任して聞き入れなかったのである。呉が滅ぼされたとき、伯嚭は不忠の臣として句践に処刑された。

2賂　賄賂。金帛の贈与。

2赦　罪をゆるす。刑罰を免除する。

キー・ポイント　李白の詩　越王句践が夫差に命乞いしたとき、美女の西施をおくったが、夫差が西施との愛に溺れているうちに句践は復讐の計画に没頭していたといわれる。次の詩は、李白が呉越の地を訪ねたとき、往時を偲んで作ったものである。

蘇台覧古（蘇台覧古）

旧苑荒台楊柳新
旧苑荒台楊柳新たなり
古い庭園と荒れ果てた高台にも楊柳が新しい芽を吹いている。

菱歌清唱不レ勝レ春
菱歌清唱春勝へず
（庭園の中の地では）菱の実を採る乙女たちの清らかな歌声が聞こえて春（の悩ましさ）に耐えられない。

只今惟有二西江月一
只今惟西江の月のみ有り

補 答 全て。すっかり。

補 答 「挙二伍員一」（一四〇・3）の「挙」とは意味が違うので注意させる。

問 **「治レ兵」（3〜4行目）とはどのような意味か。**

答 人員や装備を整えて軍隊を調練するの意。

問 ◉**「賜二子胥属鏤之剣一」（3〜4行目）とあるが、夫差が、子胥に「属鏤之剣」を与えたのは、なぜか。**

答 自害を促すため。

補 答 「賜レ剣」は、君主が臣下に自害を促すため慣用的な措置。

問 **「槨可レ材也。」（5行目）とはどのような意味か。**

答 櫝が成長して棺桶の材料になる頃には、呉は越に滅ぼされ暗君夫差の棺桶が必要になるだろうの意。

問 **「東門」（5行目）と言ったのは、なぜか。**

答 子胥は、越軍が攻め入るならば「東門」が真っ先に狙われると考えたため。

問 **遺言から子胥のどのような気持ちが読み取れるか。**

補 答 夫差への嘲罵の気持ち。伍子胥の生死を貫くキーワードは「恨み」である。それが、死に際では夫差に向けられ、越に滅ぼされるという予言的遺言となるのである。「解説」を参照。

（この地には）今はただ西方を流れる川を照らす（昔に変わらぬ）日があるばかり。

曽照呉王宮裏人
曽て照らす呉王宮裏の人
（この月は）かつて呉王の宮殿の中にいた美女（西施）を照らした（日な）のだ。

4反レ国　越の都に戻る。「国」は、国都の意。

4懸二胆於坐臥一　胆を寝起きする自分の部屋につり下げる。「懸」はつり下げる。ぶら下げる。「胆」は動物の胆のうを乾燥させたもの。「坐臥」は寝起きする自分の部屋。座ったり寝たりする日常の部屋。

4仰レ肝嘗レ之　上を向いて胆をなめた。苦い胆をなめることで夫差から受けた配線の恥辱を忘れることのないようにするため。

4女忘二会稽之恥一乎　お前は会稽山で受けた（あの苦い）恥辱を忘れたか。「女」は「汝・而・爾・若」と同じ。二人称代名詞。「乎」は、疑問・反語を表す助字。「句法」参照。「会稽之恥」とは、会稽山で受けた敗戦の恥辱。一般に「敗戦の恥辱」の意に用いる。

● 一四二ページ

1挙二国政一　国政の全てを。「挙」は、全て、すっかり残らず、みな。「挙国一致」「挙党体制」など。前出「挙二伍員一」の「挙」は登用するの意。

1属　任せる。委ねる。委嘱する。「嘱」と同じ。

1大夫種　「大夫」は周代の官名。家老職に相当する重臣。「種」は文種。生没年未詳。范蠡と並ぶ越王句践の重臣。越が会稽で呉に敗れ、句践が討ち死にを決意したとき、伯嚭に賄賂を贈ることを献策して句践を励まし、自ら使者にたち和議を成立させて句践の危機を救った。句践は国政を范蠡に委ねようとしたが、范蠡の「軍事なら自分が上だが、内政では文種のほうが上」とする意見に従って文種に国政を任せた。句践の覇業達成の後、范蠡は身を引いたが文種はその機会を逸し、句践から疑われて自害させられた。

1范蠡　生没年未詳。楚の人。字は少伯。越王句践の重臣。句践に仕えること二十数年にして、ようやく宿敵呉を滅ぼした。しかし范蠡は、「蜚鳥尽き良弓蔵され狡兎死し走狗烹らる。（人は利用価値のある間はこき使われるが、無用になると捨てられてしまう。）」

問 **「為二幎一」（10行目）して死んだのはなぜか。**

答 子胥の諫めを聞かずに、越王句践を赦し、呉の滅亡を招いてしまい、子胥に合わせる顔がないという自己を恥じる気持ちから。

補 自責の念を表現した言葉であることを理解させたい。

問 **夫差が「臥薪」し、句践が「嘗胆」するに至った経緯と、そうすることによって得られた結果とを、それぞれ整理せよ。**

答 夫差の臥薪＝父の闔廬が越との戦いに敗死し、その復讐の思いを忘れないようにするため。結果、越を夫椒に破り、会稽山で越王句践を降伏させた。
句践の嘗胆＝会稽山で呉に敗れた屈辱を忘れないようにするため。結果、呉を滅ぼし、夫差を自殺に追い込んだ。

（「史記」越王句践世家）と言ってさっさと句践のもとを去り、斉に行き農耕で財を築いたが、宰相就任を懇願されるやその資産を人々に分け与え、今度は陶に移り陶朱公と名乗り、農耕交易に従事して再び巨万の富を築いた。このように日本では、児島高徳の「天莫レ空二句践一、時非レ無二范蠡一」の句で忠臣として知られる范蠡も、本領はむしろその後半生の、名誉権力に恬淡とした明哲保身ぶりにあるといってもよい。

2 治レ兵　人員や装備を整え軍隊を調練する。

2 事レ謀レ呉　どうしたら呉を滅ぼすことができるかあれこれと考える。「事」は、そのことに専念する意。

3 譖　中傷する。讒言する。うその訴えをする。

3 恥二謀不一レ用　前四八五年、呉王夫差は斉国内の乱れに乗じて斉を伐とうとした。子胥がこれを諫めて「斉は呉にとって皮膚病のようなもの、越は内臓の病、句践が生きている限り油断はなりません。越こそ伐つべきです。」と言ったが呉王夫差には用いられなかった。この戦い（艾陵の戦い）では呉が勝利し、その後も夫差は戦勝を重ねて慢心するようになった。そこに子胥のみは呉の亡国の影を認め、たびたび諫言したが次第に夫差の不興をかうこととなった。呉の亡国を感じ始めた子胥は、斉に使いしたとき息子を斉の地に預ける。政敵の伯嚭はこれを好機と捉え、夫差に讒言し子胥を自害に追いやるのであった。「恥」は不名誉と思う。悔しいと思うの意。

3 怨望　恨む。思うようにならずに不満を持つ。「望」も、恨むの意。

3 夫差乃…　「乃」は、そこで。上のことと下のこととが密接せず、ある抵抗や経緯を踏まえてつながる気持ちを表す。ここでは、それまで子胥がたびたび諫言して夫差としてはおもしろくなかったが、ここにきてやっと子胥を罪する、という気持ちを表している。

3 賜二子胥属鏤之剣一　「賜剣」とは君主が臣下に剣を賜うこと。自害を強いる慣例的な措置。「属鏤之剣」は、名剣の名。地名に由来するとも、鋼鉄の糸を切るくらい鋭利であることを示す名であるともいわれる。

5 櫝可レ材也　櫝が成長して棺の材料になる頃には呉は越に滅ぼされ、暗君夫差の棺が必要になるだろうの意。「櫝」は木の名。ひさぎ。ノウゼンカズラ科の落葉高木。乾

燥すると堅くなり、よく湿気を防ぐので棺の材料として用いられた。

5東門　「東門」は呉の都・姑蘇の東門。子胥は、越の最善の戦略が「東門」から攻め入ることと考えこのように言ったとも、越が呉の東にあり、呉を攻めるには東から来るのでこのように言ったとも考えられる。

6自剄　自分で自分の首をはねること。自殺すること。時に、前四八四年。「剄」は、「くびきる・くびはねる」と読む。

6鴟夷　酒を入れる馬皮製の袋。一説に「鴟」も「夷」も鳥の名で、その腹や喉袋のように大きい袋だという。尸を鴟夷に入れて川に流したのは、子胥の霊の戻ってくることを恐れたためともいうが、いずれにせよ死者に対するひどい冒瀆の仕打ちである。

7立二祠江上一　「祠」はほこら。ほこらを建てたのは、非業の死を遂げた子胥に対する鎮魂のためである。「江」は長江。「上」は、ほとり。

7命　名付ける。命名。

8生聚　人口を増やし、物資を蓄えて、国力を充実させる。

8教訓　兵を訓練する。軍事訓練をする。国民を兵士として訓練する。

8周元四年　前四七三年。実際には、前年には呉は越に滅ぼされていた。

9三戦三北　「三」は、何度もの意。「吾日に吾が身を三省す。」（「論語」学而）の「三」と同じ。「北」はそむく。逃げる。敗北。前四八二年、呉王夫差が黄池に諸侯と会盟し、呉の兵力が手薄になったすきに越王句践は呉を攻撃し、太子を殺し呉都を陥れた。越はまだ一気に呉を滅ぼすには力不足と判断し呉の和議を受け入れたが、四年後弱体化した呉を伐ち、呉の都を囲むこと三年、ついに夫差は都を捨てて姑蘇山に逃げ込んで呉越の抗争は最終局面を迎えた。

9姑蘇　姑蘇台。姑蘇山（現在の江蘇省蘇州市にある山）にあった夫差の宮殿の名。ここで夫差は、越から贈られた美女西施をはべらせて遊宴したという。「キー・ポイント」の「李白の詩」を参照。

9亦請二成於越一　（先に越王句践が会稽山でしたのと）同じように講和を願い出た。「亦」は、同じく。句践が会稽山で敗れたとき、呉に講和を願い出たのと「同じように」。「成」は、講和・和解。

9范蠡不レ可　范蠡は聞き入れなかった。「史記」越王句践世家によれば、句践は夫差の助命嘆願を受け入れようとしたが、范蠡は「前に呉は天が与えたものを受け取らなかったまでのこと、今度は天が呉を越に与えようとしている。これを受け取らないのは天意にそむくこと。」と言って、呉の使者を追い返してしまった。それでも句践はかつて許された恩に報いようと夫差に百戸の領地を与え臣下とし助命しようとした。ところが、夫差は「私はすでに年老いています。とても君主にお仕えすることができません。」と辞退し、ついに自害したということだ。

10無二以見二子胥一　子胥に合わせる顔がない。子胥の諫めも聞かずに、越王句践を赦し、呉の滅亡を招いてしまった自己の不明を恥じる気持ちが表現された言葉。

10幎冒　死者の顔に掛ける四角の布。一尺二寸四方のもので、絹を用い、四隅に紐をつけて後ろで結ぶ。「幎」は顔を覆う布。「冒」は覆う。

句法

挙二伍員一謀二国事一・説二夫差一赦レ越　使役形。使役を暗示する「説・命・挙」などの動詞が上にくる場合、下の動詞を使役に読む。その場合、文語で使役を表す「しむ」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

出入使二人呼一曰　使役形。一般に「使ＡＢ」は、「ＡヲシテＢセシム」と読み、「ＡにＢさせる」意。

而忘二越人之殺二而父一邪　疑問形。「邪」は文末に置く疑問の助字。疑問の助字としては「乎・耶・与・歟・也・哉」などがあるが、「邪」は特に不審に思って言いとがめるような語気がある。ここでは、「まさか忘れはすまいな」というニュアンス。

奢誅・恥二謀不一レ用　受身形。文脈から受身に読む。その場合、文語で受身を表す「る・らる」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

解説

春秋時代――呉楚の抗争――

春秋時代の末期、長江下流域に呉と越の二国が急に勃興して楚や中原の国を脅かし、一時はそれぞれに諸侯を会盟して覇を称えたが、互いに死闘を繰り返した末、また急に滅び去ってしまった。呉越が最初に戦ったのは周の敬王の十年（前五〇四年）、越が呉を滅ぼしたのは前四七三年で、呉越の抗争は三十八年に及ぶことになる。が、その前後の事情、つまり両国が急速に勃興してきた歴史的、文化的背景や、呉を滅ぼしたあとの越の事蹟などについては不明の点が多い。この地方に青銅や製陶の技術などではむしろ中原より進んだ独特の文化があったことが知られており、そのような素地の上に、中原諸国の政治的情勢などから人的物的交流が盛んになり、急速に力を蓄えてきたものと思われる。

呉越の抗争は、その歴史舞台への登場退場の仕方、夫差・句践二王の抗争の経緯など非常に小説的であるが、もう一つ注目すべきことは、その舞台を彩る脇役としての伍子胥と范蠡との対照的なあり方である。伍子胥の生と死を貫くキーワードは「恨み」である。その「恨み」の激しさが楚の平王の屍に笞打たせ、死に臨んでは夫差への嘲罵の言葉となって、自らの死後にまでその悲劇を深めた。一方の范蠡が、全てを手に入れられるとき、逆に全てを投げ出して、結果として生を全うした。これらについて「十八史略」本文から詳しい経緯を知ることはできないが、適宜補いつつ進めれば、より深い理解が得られるだろう。

鑑賞

呉楚の興亡の地を訪れた李白（七〇一～七六二）は、その地で二首の詩を詠じている。そのうちの一首はキーポイントで紹介した。ここでもう一首を紹介しよう。

［本文］

越中覧古
越王句践破レ呉帰
義士還レ家尽錦衣

宮女如レ花満二春殿一
只今惟有二鷓鴣飛一

［書き下し文］

越王句践　呉を破りて帰る
義士家に還るに　尽く錦衣す
宮女は花のごとく　春殿に満ちしも
只だ今　惟だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ

［現代語訳］

越王句践は、（夫差の治める）呉の国を破って凱旋した。
（呉に敗れた後、二十年間も越王句践に）忠義を尽くした戦士たちは、自分の家に帰って、みな（恩賞の）錦織りの衣服を着た。
（越の国は全盛をきわめ）宮中に仕える女性たちは、花のように美しく、春の宮殿に満ち溢れていた。
（ところが）今は（すべてが廃墟となってしまい、）ただ鷓鴣がわびしく飛んでいるだけだ。

（「研究資料漢文学　新装版　第四巻　詩Ⅱ」堀江忠道・大地武雄　明治書院　平十五　二七ページ～二八ページによった）